

## 「安息日論争 2」

2021年11月08日

イエスは怒って彼らを見回し、そのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。ファリサイ派の人々は出て行き、すぐにヘロデ党の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談を始めた。(マルコ福音書3章5節～6節)

イエスが多くの人を癒やされたので、病苦に悩む人たちが皆、イエスに触れようとして、押し寄せてきたからである。(マルコ福音書3章10節)

主イエスは安息日にいつものように会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。人々は、主イエスが安息日に癒されるかどうか、うかがっていた。もし、癒せば、律法に違反したと訴えようとしていた。主イエスは、彼らの悪意に満ちた視線を受け止めながら、手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言い、立ち上がった彼に注目させた。そして、人々に、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」と問いかけた。善を行い、命を救うことがよいに決まっている。しかし、安息日に、治療を行うと、労働となり、安息日の律法に違反することになる。律法に違反すれば、共同体から排除され、生活ができなくなる。人々は答えに窮し、黙ってしまった。権力に脅されるということは、言葉を失うことである。

マルコ福音書の記者は、「イエスは怒って彼らを見回し、そのかたくなな心を悲しみながら、その人に、『手を伸ばしなさい』と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった」と、神の子イエスの癒やしを直截に書いている。主イエスは、権力者の圧力に怯えて言葉を奪われ、病苦に悩む人の苦しみを理解せず、律法に囚われた人々の頑なな心に怒りと悲しみを覚えた。手の萎えた人に「手を伸ばしなさい」と言うと、手は元通り、回復したという。彼はどれほど喜んだであろうか。安息日に救いを得たのである。

これを見たファリサイ派の人々は出て行き、ヘロデ党の人々の所に走った。領主ヘロデはローマ支配を容認する政策を取っていたので、彼に従うヘロデ党の人々は当然「親ローマ」の立場にあった。一方、ファリサイ派の人々は、先祖イスラエルの宗教に生存をかけた集団で、ローマ支配に反抗する愛国主義者であった。ファリサイ派とヘロデ党は立場を異にする、いわば、犬猿の敵対関係にあった。ところが今、両者は、主イエスを殺して、亡き者にしようとする目的で、一致し、仲間になった。敵の敵は味方という訳である。「安息日論争」をきっかけに、律法を犯してまで人々を愛する主イエスは、宗教体制、権力を護持しようとする両サイドから敵視され、命を狙われることになっていった。

主イエスは弟子たちと共にガリラヤ湖の方に退かれた。ガリラヤから来た群衆は、主イエスに付いて来た。また、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こうから、異教のティルスやシドンの辺りからも、大勢の群衆が主イエスの言動を聞いて、救いを求め集まって来た。群衆に押し潰されないように、小舟の上から話されたこともあった。

「イエスは多くの人を癒やされたので、病苦に悩む人たちが皆、イエスに触れようとして、押し寄せてきたからである。汚れた霊どもは、イエスを見るとひれ伏し『あなたは神の子だ』と叫んだ。」主イエスは、集まって来た大勢の病苦に悩む人たち病む者を癒やされた。悪霊は、主イエスを見抜き、「あなたは神の子だ」と叫んだ。悪霊は戒められた。主イエスは病苦に悩む人たちの苦しみを担い、時代を揺り動かす大きな宣教活動を展開された。